

2023 年度イラン短期研修プログラム 報告書

お茶の水女子大学 文教育学部
人間社会科学科 教育科学コース 4 年
塩満 理恵

1. はじめに

私は、2024 年 2 月 10 日から 2 月 22 日にかけて開催された、公益財団法人笹川平和財団アジア・イスラム事業グループ主催のイラン短期研修プログラムに参加した。イラン・イスラーム共和国（以下イラン）現地では、イラン外務省付属の国際関係学院（School of International Relations, 以下 SIR）を受け入れ先とし、テヘラン、エスファハーン、ヴァルザネ、カーシャーンの各都市にて様々な視察や活動に参加する機会を与えられた。本報告書では、イラン短期研修プログラムを通じて得た気付きや知見を記録する。なお、本報告書の内容はあくまでも筆者の個人的な見解をまとめたものであり、所属組織や本研修主催団体の意見や立場を表明したものではない。

2. ヘジャーブ着用をめぐる女性たちの選択

2022 年、イランで頭髪を隠さなかった女性が逮捕されたのちに死亡した事件を発端に、世界各地で激しい抗議デモが勃発した。英国留学中にデモの様子を目の当たりにした私は、イランにおける女性の地位や権利に興味を持ち、本プログラムへの参加を希望した。

イスラーム社会では女性の権利が制限される傾向にあるという日本での一般的な認識に反して、イラン現地で出会った女性たちは必ずしも抑圧されているようには見えなかった。女性がイランを訪問する際、イラン人であるか否かにかかわらず、着陸する前の飛行機で頭髪を覆うヘジャーブを着用する必要がある。例に漏れず私たち研修参加者も、ドバイからテヘランに向かう飛行機が着陸する直前には緊張感を覚え、慣れない手つきでヘジャーブを装着した。ところが、私たち日本人の研修参加者以外の搭乗客であるイラン人女性たちは、一向にヘジャーブを身に付けようとはしない。それどころか、ヘジャーブラしきものを取り出す様子もなさそうである。前列に座っていたイランの母娘は、私たち日本人が早々にヘジャーブを装

着したのが面白かったのか、こちらを見つめて笑いをこらえきれない様子だった。結局彼女たちは、空港に到着して保安検査に向かうまでの間に、煩わしそうにヘジャーブを取り出して身に付けていた。彼女たち以外にも、テヘランではヘジャーブを着用せずに身体の線が出る服装をしていた女性を数名見かけた。

一方で、エスファハーンやカーシャーンなどの地方都市ではそのような装いの女性を見かけることはなく、テヘランでは見かけなかった真っ黒のチャードルで身を包んだ女性と複数回遭遇したため、都市部と地方の女性の意識や宗教観の違いを感じた。

当事者である女性たちと直接ヘジャーブ着用について話す機会があったわけではないため、あくまで憶測にすぎないが、イラン人女性といってもヘジャーブをめぐる解釈や選択は個人によって大きく異なると考えられる。

3. イラン人女性の高学歴化

一般的にイスラーム社会は女子教育に消極的な場合が多いが、イランでは女性の高学歴化が進んでいる。1979年のイスラーム革命以降、学校教育現場における徹底した男女隔離政策が実施されたことなどにより、娘の就学に対する保護者の不安が払拭され、イランにおける女性の就学率と識字率は上昇傾向¹にある。2020年のイランにおける女子の高等教育進学率は57%で、1978年の3%からは大幅に上昇している²。引率してくれたSIRの女子学生は既に別の分野で修士号を取得していて、現在は子育てをしながら、2つ目の修士号を取得するために大学院に在籍しているとのことだった。

女性の高学歴化が進む一方、高等教育を受けた若者の失業率の高さが問題となっている。SIRで修士号を取得した後の進路について女子学生たちに尋ねてみたところ、「SIRが外交官を養成するための大学院なので外交関係の仕事に就けたらとは思いますが、今のイランでは就職が難しい。特に自分は女性なので、男性の就職とは違

¹ Rahbari, Ladan, 2016, “Women in Higher Education and Academia in Iran,” *Sociology and Anthropology*, 4(11): 1003-1010.

² The World Bank Data, 2023, “School enrollment, tertiary, female – Iran, Islamic Rep.”

(Retrieved March 12, 2024,

<https://data.worldbank.org/indicator/SE.TER.ENRR.FE?locations=IR.>)

う難しさがある」「より良い職に就くためではなく、学びたいことがあったから大学院まで進学した。今後の進路については、卒業してから時間をかけて考えるつもりだ」という返答が得られた。高等教育が大衆化していく中で、イラン人女性が高等教育と就業の接続をどう捉えているのか、現状はどうかを、今後の調査で明らかにしていきたい。

4. おわりに

日本で得られるイランについての情報は断片的なものであり、無知に起因するイランに対しての誤解や偏見は未だに根強い。私自身、本プログラムでイランに渡航することを周囲の人々に報告した際に、複数の人から渡航を懸念する声を聞いた。実際にイランに渡航して、SIRの講義を受けたり、様々な施設を視察したり、現地の方と話す中で、西側諸国寄りの情報に接しているだけでは持つことのできなかったイランを見つめる多様な視点を得た。イラン人たちは、総じて日本に対して良い印象を抱いており、友好国としての日本に強い期待を寄せている。今回の研修への参加を通じて、イラン人たちが日本に抱く好意に応えるべく、今後も両国の伝統的な友好関係の維持に貢献していきたいと強く感じた。

末筆ながら、今年度のイラン短期研修プログラムを企画し、渡航から帰国までの引率を担当してくださった笹川平和財団の皆様、現地コーディネーターの穴田慶子様、受け入れ先となってくださったSIRの教職員や学生の皆様に、心より御礼申し上げます。